

---

# 李退溪『聖学十図』における「敬」の意義

小林 寛

---

## 要約

本稿は、李退溪(1501～1570)の『聖学十図』における「敬」を考察する。李退溪の人間観は「敬」にあらわれる。「敬」は「心」「身」を結びつける。李退溪は『聖学十図』「第六図」において、「心」は「生まれつきの心と感情とを主宰する」という。心は「身を主宰する」「すべての変化をつかさどる」ものとする。心は生まれつきの心と感情とでできている。「第八図」においては心は「身を主宰する」、敬は「心を主宰する」という。ここからすると、敬は心を宰し、万化をつかさどる。心は能動的なはたらきをもつ。心が万物の理気を宰するのは「敬」のはたらきによる。人が人としてある理由は「敬」に根拠を有する。

キーワード：李退溪，心，敬，心統性情，一心の主宰

## はじめに

本稿では李退溪(1501-1570)<sup>1)</sup>の『聖学十図』における「敬」「心」「身」をその位置関係から再検証することで、「敬」の役割からする李退溪の人間観の一端を探るてがかりとしたい。李退溪は『聖学十図』「第六心統性情図」において、「心」は「性と情とを統べる」ことを示し、心は「一身を主める」「万化を該る」ものとする。心の領域の中に性が位置付けられ、虚霊・不昧であり、知覚をもつものが「性」であるとする。「第八心学図」においては、心は「一身の主宰」、敬は「一心の主宰」として位置づけられている。ここからすると、敬は心を主宰し、性情を統べる、能動的なはたらきをもつ。性は理、情は気であるとするとき、心は理気を修める役割を有して、それが「敬」のはたらきに相当する。

そこで本稿では、まず李朝朱子学の、天・地を人が完成させるという世の中が「至善に止まる」役割をもつ人間把握を『訓民正音』『訓民正音解例』の解釈に確認する。これと、主として李退溪の『聖学十図』を中心とする人間把握との関連性を確認し、次に李退溪の『心経附註』『天命図説』などを参照しながら『聖学十図』の「敬」の把握から、その意義を考察することとしたい。

## 1. 李朝朱子学と『訓民正音』『訓民正音解例』

### (1) 李朝における朱子学の導入

李朝における社会構造全般への朱子学の導入は、李成桂・太祖(1335-1408/在位1392-98年)によって、現世秩序の維持、政治的な支配構造の継続性を重視して図られた経緯がある。そこには鄭夢周(1337-1392)、鄭道伝(?-1398)らからの影響があることは周知のことでもある。李朝における朱子学導入は、韓半島に流れる伝統的な「天」への信頼性に裏打ちされているとみることができ

### (2) 世宗大王の『訓民正音』

世宗大王(1397-1450)は儒教によって王道政治を実現することを目指した。儒教の政治的具体化は世宗大王によって進展する。世宗大王による『訓民正音』(1443創成1446公布)制定においては、儒教理論によって国の文化の基層までも形成する方向性が表れる。『訓民正音』の有名な叙は「民」を意識した表明になっている。

國之語音，異乎中國，與文字不相流通，故愚民，有所欲言，而終不得伸其情者，多矣，予為此憫然，新制二十八字，欲使人人易習，便於日用耳<sup>2</sup>

「国の語音は、中国と異なり、文字とたがいに流し通じない。故にあわれな民は、言おうとおもう所が有っても、ついにその情を伸べることが得られない者が多い。予はこの為に憫然として、新たに二十八字をつくり、人人にた易く習わせ、日用に便であるようにさせたいとねがうだけである」という。民の便易を考えて「訓民正音」が制せられたことが述べられる。文字制定においても民を本にする考え<sup>3</sup>が示され、儒教的論理の民本思想が表明されているといえることができる。また、国の語音の特性を言いながら、しかし、物事の道理を極めれば宇宙に通じる文字ができるという、「理」の究明が国を超えて世を統べ得る意識が内包されているのには注意が払われねばならない。こうした李朝の朱子学尊重の儒教体制のなかに、李退溪の思想も育まれてきている。

### (3) 『訓民正音解例』における人間観

鄭麟趾(1396-1478)による『訓民正音解例』には、「理」の究明によって世を貫く道理を世宗大王が人間世界に付与しうることを述べる立場がいつそう明確に表される。「理」が直接的に人間世界を治めることはできない。理を極めた人間が理のとおり人間世界とこの世のすべてのものを治めることができる。この天地人の論理関係は李退溪思想にも明確に表れる。『訓民正音解例』には文字「訓民正音」によって、宇宙にあるあらゆるものが表現できるという陰陽五行理論への深い信頼が伺われる。この時、その人間観は、天と地との間にあって、人間はその両者をつなぎ世界を完成させ主管するものという位置付けが示される<sup>4</sup>。

無極之真，二五之精，妙合而凝<sup>5</sup>

さらに人は、天地の「財成輔相」を成すという。

兼乎動靜者人也

（五行）在人則仁禮信義智，神之運也，肝心脾肺腎，質之成也

天地生成萬物，而財成輔相則必頼人也<sup>6</sup>

「動と静とを兼ねるものは人である」「（五行が）人にあれば，仁禮信義智は，神が運ぐるものであり，肝心脾肺腎は，質が成るものである」「天地が万物を生成して，財成輔相は則ち必ず人を頼るのである」といい，こうして，人間は天と地の融合によってできているのであって，だからこそ，人間は天地のすべてを再生し完成する，統べることができる存在であることになる。『訓民正音解例』においては，人間を，陰陽五行の秀を得て最も靈なるもの，陰陽五行の精が凝ったものと捉える。発音も言葉も人間のもので，それを記す文字もまた人間，万物を表しうるものであった。人間は万物の靈であるとされる。「無極之真，二五之精，妙合而凝（無極の真，二五の精，妙合して凝る）」とは，この把握は太極図説の言を引くもので『太極図説』の人間把握と共通している。李退溪は『太極図説』を『聖学十図』の第一に置いて「第一太極図」としている。

『訓民正音解例』は天について，「発し動くということ」「動くもの」「五行が天に在れば神がめぐるのである」という。地については，「止り定まるとということ」「静かなるもの」「（五行が）地に在れば，質が成るのである」という。人については，「動静を兼ねるもの」「天地は萬物を生成して，その財成輔相をするものとして必ず人による」「（五行は）人に在れば仁禮信義智であって，神がめぐるのである。肝心脾肺腎は，質が成るのである」という<sup>7</sup>。天は発し動きくすしき力たる神がめぐっている存在であって，地は止まり定まって静かで，質が成るものであって，人はここに仁禮信義智という神がめぐっており，肝心脾肺腎という質が成った臓器肉体を持っている。両方の性質を有する存在である人は両者を統治し完成することができる。こうして天地人を並べて人は天地に参して両者の性質を共に有する者であることが明らかに示されている。万物を三才の構造で捉える把握は，朱子学の人間把握による。儒教にも様々な人間把握があるなかでこうした人間把握は李朝開国以来の国家的人間観であるということもでき，これが李朝朱子学の基層に流れている。

## 2. 李退溪『聖学十図』と朱子学陰陽五行論と

### （1）五行論と箕子伝承

李朝朱子学において，五行を重視し五行が人間と直結すると考えるのは，箕子の伝承が經典に存することにも一因がある。天地の理たる五行はその両者を受ける「人」にも共通していると五行思想はいう。孔子以前から五行思想が韓半島に伝わっているとする「儒教伝承の尊重」が李朝にはある。天と地と人とは根元を同じくし天人が相関すると把握するのは陰陽論と五行論とで共通する。

陰陽論と五行論とは、元来は別々に生成し発展したもので、時を経て融合する。陰陽論は鄒衍(前3世紀頃)に見られ、『説文解字』許慎(後漢)にも、陰陽の文字の成り立ちについての素朴な説明が見られる。一方、五行論について『書経』「洪範」が早くに見られる例であって、これが韓半島にかかわる。「洪範」には箕子伝承が次のように語られる。

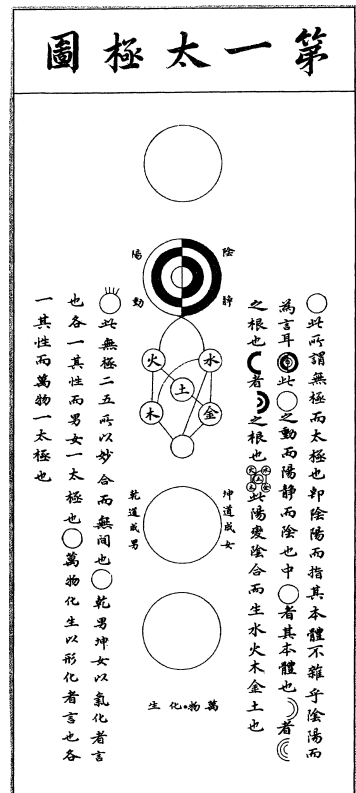
武王勝殷，殺受立武庚，以箕子歸作洪範，惟十有三祀，王訪箕子，王乃言曰，嗚呼箕子，惟天陰騭下民相協厥居，我不知其彛倫攸叙<sup>8</sup>（「武王は殷に勝ち，受を殺して武庚を立て，箕子を以て歸り洪範を作る。惟れ十有三祀，王，箕子を訪ふ。王は乃ち言ひて曰く、『嗚呼，箕子よ，惟れ天は下民を陰騭して，厥の居を相ひ協けしむ。我，其の彛倫の叙するところを知らず』と。）」

殷王朝の最後の王たる紂王の，異母兄弟あるいは親族であると伝えられる箕子に対して，周の武王は民の統治の仕方を尋ねたという。「(周の)武王が殷に勝ち，受(紂王)を殺して武庚を立て，(朝鮮にいた)箕子をつれてもどり『洪範』を作った。これは十三年のことにあたる。王は箕子を訪ねた。王がすなわちいうことには、『ああ，箕子よ，そもそも天は下民を陰騭して，その居をたがいに協けさせた。我は，その彛倫の叙するところを知らない』と(いい，教えることを願った)」，というのであるから，殷王朝の文化の精髓たる五行思想が周王朝の統治以前に「朝鮮」すなわち韓半島に存在したことになり，そして，それを周王朝に伝えたということは，殷の文化が周の文化の起源のひとつになっていること，言い換えると韓半島の文化が周の文化の起源のひとつを為していることを意味することになるのであって，周末の時代たる春秋時代の孔子の学，戦国時代の孟子の学の中に，韓半島の文化が潜んでいることになる。李朝において箕子の墓が設けられ，祭祀が行われていたことは李朝の箕子尊重の意識の大きさを今に伝える。箕子の学を伝えるとする「洪範」は五行を以て核心としており，李朝において五行が重要視されたおおきな理由となっている。

(2) 李退溪『聖学十図』「第一太極図」

『聖学十図』において特に「第一太極図」「第六心統性情図」，「第八心学図<sup>9</sup>」を取り上げておきたい。李退溪の『聖学十図』は李退溪が六八歳の時に編集されたと伝えられ，学の集大成であるとも評される。『聖学十図』における心と身の位置関係を確認することで，「敬」の意義からする李退溪の人間観の一端を検証しておきたい。

「第一太極図」は「太極図説」を引用して『聖学十図』冒頭に置かれる。「太極」なる語は『易経』に起源を有する。



「太極図」そのものは周濂溪(1017-1073)によるものであり、「太極図説」は朱熹(1130-1200)による。

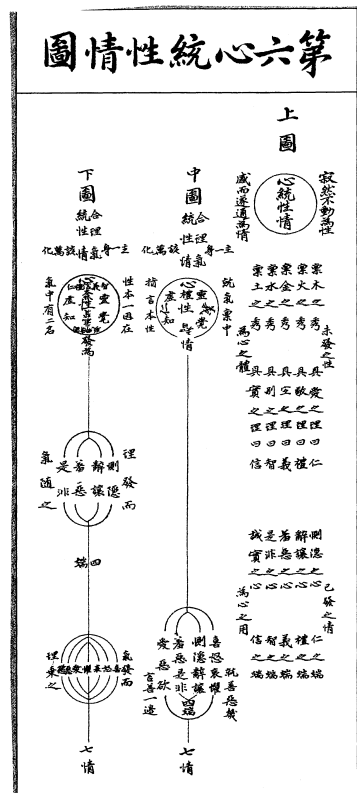
『聖学十図』「第一太極図」について、李退溪は十九歳<sup>10</sup>に「朱子の『性理大全』にある「太極図説」を読むに及んで豁然として眼開け朱子哲学の端緒について自得した」という。「豁然」とは「豁然貫通」の意で、あらゆる存在のすべてを貫く理解が得られることをいう。八条目の本であり始めである「格物<sup>11</sup>」が実現したことを意味する。そして「太極図」の趣旨は、万物は「太極」に由来し、すべてが一体であることを語る。

『訓民正音』でいえば「・」であり、「・」は天を意味しながら始まりの力を表すのであって、「太極動じて陽を生ずる」ことを示す。別の言い方をすれば、物が動ずる力、陽を表し、万物を周流する力を表し、創造の力、生命力を表している。李退溪にあっては「天即理<sup>12</sup>」であった。天が「動ずること」を示すとき、「理が発する」ことは李退溪においては当然でもあることになる。

### (3) 李退溪『聖学十図』「第六心統性情図」

李退溪は『聖学十図』「第六心統性情図」において、「心」は「性と情とを統べる」と示し、心は「一身を主める」「万化を該る」ものとし、心の領域の中に性が位置付けられている。虚霊・不昧・知覚であるのが「性」とであるとす。ここからすると、敬は心を主宰して、性情を統べる力を持つ。「敬」の統合の力は「太極」に由来する。

「第六心統性情図」の中図と下図とは李退溪がみずから描いた図であって、その意義は大きい。しばしば指摘されるのが本図の下図にある「理発して気これに随ふ」の部分であった。「中図は気稟の中に就いて本然の性を指出し、気稟を雑へずして言をなす」というところから、中図は気稟とは区別された「性」を示す。心を示す丸のそとに「情」が記されている。心が性情を統べるという観点からすれば、心は○の内側そのものであることになる。人間の意識は○の線上にあることになる。「下図は理と気とを以て合してこれを言ふ」と述べるところからして、下図は、○のなかに本然の性と気稟の性がまじりあっていて、これが発して四端七情となっていることが示されている。「人は五行の気を稟けて以て生ず」「その心若然として動かざるを性とす」と程林隱は言うのであるから、人の性そのものは若然として動かない。人が意をもって「統べる」のは性と情とが接するその接点であろう。まさにそこにあるのが「敬」であり、その一点にこそ、人の人たる所以がある。



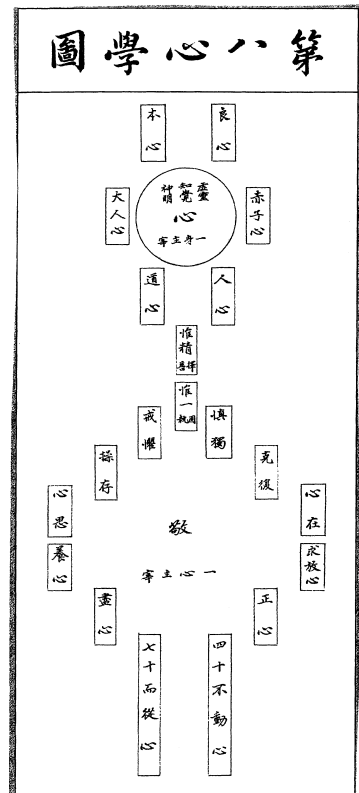
(4) 李退溪『聖学十図』「第八心学図」

李退溪は「第八心学図」において、次のように示す。

林隠程氏曰、赤子心是人欲未汨之良心、人心即覺於欲者、大人心是義理具足之本心、道心即覺於義理者、此非有兩様心、實以生於形氣則皆不能無人心、原於性命則所以爲道心、自精一擇執以下、無非所以遏人欲而存天理之工夫也、慎獨以下是遏人欲處工夫、必至於不動心則富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、可以見其道明德立矣、戒懼以下是存天理處工夫、必至於從心則心即體、欲即用、體即道、用即義、聲爲律而身爲度可以見不思而得、不勉而中矣、要乏用工乏要俱不離乎一敬、蓋心者一身之主宰而敬又一心之主宰也、學者熟、究於主一無適之說、整齊嚴肅之說、與夫其心收斂常惺惺之說、則其爲工夫也盡而優へ於聖域亦不難矣<sup>13</sup>

「程林隠が言うには、『赤子の心とは、人としての欲がまだないような良心である。人の心というのは欲をさとするものである。大人の心とは、義理をそなえた本心である。道心というのは義理をさとするものである。これには、ふたつの心があるのではない。まことに形や氣として生じるときは、すべて人の心がないということとはできない。性命に原づくときは道心であるという原因である。「精一、擇執」より以下は、人の欲をおさえて天理を存するための工夫でないということがない。「慎獨」より以下は、これは人の欲をおさえるところの工夫である。必ず、心を動かさないことに至って、ようやく富貴も乱すことはできず、貧賤も移すことはできず、威武も屈することができないようになり、そうして、道が明らかになって、徳が立つことを見ることができる。「戒懼」より以下は、これは天理を存するところの工夫である。必ず、心に従うということに至り、心はすなわち体、欲はすなわち用、体はすなわち道、用はすなわち義、聲は律をなし、身は度となって、かんがえなくても得られ、勉めなくても中ようになることを見ることができる。これを要すると、工を用いるのに、ひとえに「敬」を離れないということである。おもうに心は一身の主宰であって、敬はまた一心の主宰である。学ぶ者は、「主一無適」の説、「整齊嚴肅」の説と、かの、「その心收斂し、常に惺惺する」の説とを熟究するとき、工夫をなすことがきわめられて、優に聖域に入ることも、また難しくはない。』と。」

図においては、心は「一身の主宰」、敬は「一心の主宰」と明示される。「心」は「一身を主として宰べるもの」とされ、敬は「一心を主として宰べるもの」とされ、心と敬をつなぐものが「惟れ精、善を擇ぶ」「惟れ一、固く執る」と



なる。これは『書経』と『大学』とにある言葉で、本来二句である句が、それぞれ二つに分けられて、再合成されて別の二句となって構成されている。「惟れ精、惟れ一」は『書経』に由来する。「善を擇んで、固く執る」は『大学』に由来する。「惟れ精、惟れ一」は「くわしくつまびらかにして、ひとつをまっとうする」ことであり、「善を擇んで、固く執る」は「善なるものをえらびとって、固くまもってはなれない」ことを意味する。この両者の前半と後半を分けている。前半は「くわしくつまびらかにして、たくさんあるものの中から善をえらぶ」ことになる。これが「心」の領域にある。後半は「ひとつをまっとうして、かたくはなれない」ことになる。これが「敬」の領域にある。両者を合わせれば「たくさんあるものの中から善をえらんで、そこからはなれないでことさらにことにむかいあう」ことが「心」と「敬」とを結ぶ一点にある。ここからすれば「心」はたくさん可能性のなかから一つをえらぶこと、「敬」はえらんだものからはなれないで固くまもることをいう。別の言葉でいえば、心は「選択の自由」であり、敬は「～への自由」において、あえて理からする善の状態からはなれないことをさす。天が性であり、地が情であるとするとき、人は心であり、その主宰として敬がある。人が人である所以は、こうしてまた「敬」に根拠があることになる。このことを『心経附註』にあらためて見ておきたい。

#### (5) 『心経附註』

『心経附註』には冒頭にこのように記される。

帝曰人心惟危，道心惟微，惟精惟一，允執厥中<sup>14</sup>（帝曰く、人心惟れ危く、道心惟れ微かなり。惟れ精、惟れ一、允に執厥の中を執れ、と。）

「帝はいった『人心は惟れ危く、道心は惟れ微かであって、惟れ精、惟れ一、まことにその中をとるのがよい』と」と示し、中庸の徳を説く。

今まで見てきたように、性は天であり、情は地であり、性と情とを統べる心にあつて、中和する一点は「敬」にある。性は天、情は地、そして敬は人のことがらを示すものと解釈しうる。

この図には心に天命が関わるさまが図示されている。心の虚霊と知覚とは一でありながら、人心と道心とは、異なりがある。形気の私と性命の正とによって異なるもので、本図はこれを明らかにしようとしている。形気は人心に相当し、天命は道心に相当する。人体は「形気性命」によって示されている。李退溪の『聖学十図』「第二西銘図」においては「天地に塞ちているのが吾の体」「天地の帥が吾の性」「推し行う仁」という、そこでの仁は人のことを意味することになる。第四大学図「推し行う」は「新民」について言われる。「第九敬齋箴図」においては「事に従うことが斯のようである。是を敬を持つ」とし、敬は体としては理、用としては「理の発」すなわち四端、情として現れるとみてよい。なぜならば、理気の合する地点が「敬」にあったからでもある。さまざまな事象に応ずるのが情であつて、性と情とをつなぐ一点が

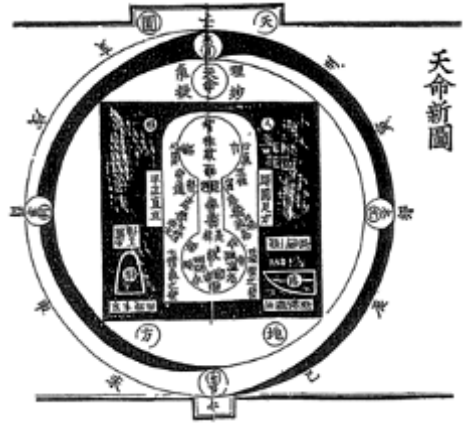
人心道心圖  
正私  
危  
形気性命  
微

「敬」となっている。

### (6) 『天命図説』

『天命図説』「天即理也」とは、李退溪の学が端的に表れた言表となっている。この天命図説の図中の○のなかには敬が位置付けられている。

この図の成立の経緯については詳細に語られているのでここでは触れない。この図は李退溪がみずから議論しながら完成に導いた図であった。この図では、心の性と情との二つの○の中心とともに「敬」がおかれていることに着目される。この図の『聖学十図』「第六心統性情図」との違いを確認しておきたい。「第六心統性情図」においては「性」と「情」との内部には、「敬」は置かれていない。一方「天命新図」では「敬」が性と情とのそれぞれの両者の中心に置かれている。性と情とはちょうど鉄アレイの形でつながっており、その性と情との両者に「敬」が存在している。「敬」には性と情とにわたって、人間の行為における意思が問われていることが表れている。



## 3. 李退溪『自省録』の「敬」

### (1) 李退溪と官職

李退溪が「敬」に居て、それに生きぬいた人物であったことはその経歴からもうかがい知ることができる。李退溪は、名は滉、初め季浩、後に景浩と字し、退溪、退陶、陶翁などと号した。号にも謙遜の意をくみ取ることが可能とすら言うことができる。1501年慶尚北道安東郡に生まれ、生後7か月で父を失い賢母の薫陶のもとに育つ。27歳進士に及第、34歳文科に及第、その冬、母の喪にあい郷里に3年の喪に服した。39歳弘文館修撰、43歳成均館司成となる。43歳(1553年)党朋の争いが起り帰郷、招命があっても固辞して赴かず、1558年まで二十数回辞退している。こうした生き方が後世、おおきな敬意を以て受け止められてきている。46歳に退溪と号する。48歳丹陽郡守となり、豊基郡守に転ずる。賜額書院たる紹修書院を設置する。在官一年で帰郷、門人の教育に専心する。52歳成均館大司成となり、間もなく病を得て帰郷、60歳陶山書堂を構える。67歳明宗が崩じ宣宗が即位して、行状修撰庁堂上卿、禮曹判書に叙せられるも、累辞して帰郷する。68歳上京して『戊辰六條疏』『聖学十図』を奉る。70歳(1570年)をもって没した。こうした生き方には「敬」の実践が表れていることに疑いを持つものがなかった。

### (2) 李退溪『自省録』「居敬」

以上みてきたことからすれば、理たる「性」と事物に応じてある「情」とを統べる「心」を日常



生活において「敬」に居ることによって修養し、理を現世に体現しようとする道学をなすのが李退溪の学であることになる。

爲學窮理太涉於幽深玄妙，力行未免於矜持緊急，強探助長，病根已成。

「学を為し、理を窮めるのに太いに幽深玄妙に涉り、力めて行うのに矜持し緊急であることを免れないで、強いて探り助長すると、病根が已に成る」という。「幽玄玄妙」にわたることを戒め、日常の中にこそ学が存在することを明言する。

第一須先将世間窮通得失榮辱利害，一切置度外，不以累靈臺。

そこで「第一に須らく先ず世間の窮通得失榮辱利害をもって一切これを度外に置き、もって靈臺に累けないようにするのがよい」という。靈臺とは「第九敬齋箴図」にも「ああ小子、これを念へ、これを敬しめ、墨卿戒めを司りて、敢て靈臺に告ぐ」と表れる、心のある所をいう。日常に居ながら、世間の窮通得失榮辱利害について、一切これを度外に置いて、心にかけないようにすると言いつつ切るところに、日常における「敬」のあり方を知る。情を悪機に染めないためには、世間の窮通得失榮辱利害を心にかけてはいけない。

凡、日用之間，少酬酢，節嗜欲，虚閑恬愉，以消遣。

「およそ日用の間、酬酢を少くし、嗜欲を節し、虚閑恬愉にして消遣する」という。欲望をなくすのではなく、外物と接する性情の動きを「敬」によっていましめ、心によって統べる。

無拂亂，以生瞋恚，是爲要法<sup>15</sup>。

そして「拂亂して瞋恚を生ずることが無いようにすることを要法とする」という。瞋恚のおもい、いかりの心があった場合は、もはや「敬」に叶ってはいないことになることをここに知る。

### （3）退溪学の日本儒学への影響

李退溪の、日常にありながら道を究める、こうしたあり方、生きた実践は、日本の知識人に大きな影響を与えた。李退溪の学の日本への影響についてはすでにさまざまに論じられている<sup>16</sup>。藤原惺窩は日本近世儒学の開祖であって、人倫を重視し、『自省録』『天命図説』を尊信した。林羅山は藤原惺窩の推挙で徳川家康の補佐となり幕府大学頭を務め、日本朱子学の基礎を築いた。『自省録』『天命図説』を尊信したと伝えられる。山崎闇斎は『自省録』を読み感奮興起して自己の学風を確立し、その弟子、佐藤直方は「元明諸儒の類にあらず」「李退溪の後、この道を負荷せんと欲する者、吾未だその人を聞かず」と評する。三宅尚斎、浅見綱斎とともに「崎門三傑」と言われた。大塚退

野は『自省録』を読んで開眼したという。横井小楠は李退溪について元明以来の「古今絶無の真儒」と評する。元田永孚は明治の教育精神の樹立を図った人物で退溪学に通じていた。「敬天愛人」をいう西郷隆盛、「則天去私」をいう夏目漱石の思想も淵源をたどれば李退溪の「敬」に接近する。藤原惺窩も林羅山も山崎闇斎も、いずれも元僧侶であって還俗し儒者となったのは、出世間して世俗を離れるのではない、李退溪の日常を離れない学にひかれた事を大きな理由とすることを見出すことができる。

#### おわりに

本稿では主として李退溪の『聖学十図』における心と身の位置関係を再確認してきた。「敬」に着目して「心」「身」の位置づけをみると敬の役割からする李退溪の人間観の一端を理解することができよう。李退溪は『聖楽十図』『第六心統性情図』において、「心」は「性と情とを統べる」と示し、心は「一身を主める」「万化を該る」ものとし、心の領域の中に性が位置付けられ、虚霊・不昧・知覚であるのが「性」であるとする。「第八心学図」において、心は「一身の主宰」、敬は「一心の主宰」という。ここからすると、敬は心を主宰して、性情を統べる力を持つ。両者を合わせれば「たくさんあるものの中から善をえらんで、そこからはなれないでことさらにことにむかいあう」ことが「心」と「敬」とを結ぶ一点にある。ここからすれば「心」はたくさんの方の可能性のなかから一つをえらぶこと、「敬」はえらんだものからはなれないで固くまもることをいう。別の言葉でいえば、心は「選択の自由」であり、「～への自由」によって、そこから善をあえて選択する。敬は「～への自由」において、あえて理からする善の状態を選び、そこからはなれないという「自己決定」をさす。天が性であり、地が情であるとするとき、人は心であり、その主宰として敬がある。人が人である所以はこうしてまた「敬」に根拠があることになる。

(こばやし ひろし つくば国際大学非常勤講師)

#### 注

- 1 名は滉、初め季浩、後に景浩と字し、退溪、退陶、陶翁などと号する。1501年慶尚北道安東郡に生まれる。生後7か月で父を失い賢母の薫陶のもとに育った。27歳進士に及第、34歳文科に及第、その冬、母の喪にあい郷里に3年の喪に服した。39歳弘文館修撰、43歳成均館司成となる。43歳(1553年)党朋の争いが起こり帰郷、招命があっても固辞して赴かず、1558年まで二十数回辞退している。46歳退溪と号する。48歳丹陽郡守となり、豊基郡守に転ずる。賜額書院たる紹修書院を実現する。在官一年で帰郷、門人の教育に専心する。52歳成均館大司成となり間もなく病を得て帰郷、60歳陶山書堂を構える。67歳明宗が崩じ宣宗が即位して、行状修撰庁堂上卿、禮曹判書に叙せられるも、累辞して帰郷する。68歳上京して『戊辰六條疏』『聖学十図』を奉る。70歳(1570年)没する。
- 2 『訓民正音』叙を参照されたい。語末の「耳」を「矣」とする写本もある。国訳訓民正音では「耳」になっている。

- 3 儒教の民本思想に関する研究を参照されたい。
- 4 『訓民正音解例』における人間観は、拙稿「『訓民正音解例』における人間観」『つくば国際大学紀要』を参照されたい。
- 5 『訓民正音解例』を参照されたい。
- 6 『訓民正音解例』を参照されたい。
- 7 いずれも『訓民正音解例』を参照されたい。
- 8 『尚書』「洪範」を参照されたい。
- 9 「第七図」であったものが後に「第八図」に改定された。
- 10 全集の記述からは満年齢で「十七・八歳」ともとれる。数えの年齢で「十九歳」となり、これが周知される。成均館大学校李致億先生からご教示をいただいた。
- 11 「格物，致知，誠意，正心，修身，齐家，治国，平天下」を八条目とする。「格物」なくして「平天下」はあり得ない，という。
- 12 『天命図説』を参照されたい。
- 13 『聖学十図』「第八心学図」を参照されたい。林隠の程氏日く、赤子の心はこれ人欲未だ汨さざるの良心なり。人心はすなはち欲に覺き者なり。大人の心はこれ義理具足するの本心なり。道心すなはち義理に覺き者なり。これ兩様の心あるにあらず。實に以て形氣に生ずるときはすなはち皆な人心なきこと能はず。性命に原づくときはすなはち道心たる所以なり。精一，擇執より以下は人欲を遏めて天理を存する所以の工夫にあらずといふことなきなり。慎獨より以下は、これ人欲を遏むる處の工夫なり。必ず心を動かさざるに至りて、すなはち富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はずして、以てその道明かに徳立つこと見るべし。戒懼より以下は、これ天理を存する處の工夫。必ず心に從ふに至りて、すなはち心はすなはち體、欲はすなはち用、體はすなはち道、用はすなはち義、聲は律をなし、身は度となりて以て思はずして得、勉めずして中ること見るべし。これを要するに、工を用ふるのに一の敬を離れず。蓋し心は一身の主宰にして、敬はまた一心の主宰なり。學者、主一無適の説、整齊嚴肅の説と、かのその心收斂し、常に惺惺するの説とを熟究するときは、工夫をなすこと盡きて、優に聖域に入ること亦た難からず。
- 14 『心経附註』冒頭を参照されたい。
- 15 『日本刻版李退溪全集(下)』退溪學研究院1983年『自省録』321頁を参照されたい。
- 16 阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』をはじめ、多くの著作がある。

## “The kyeong (敬)” in YI, Twegye

Hiroshi Kobayashi

This paper considers ‘Kyeong (敬)’ in “Seon hak sip do (『聖学十図』)” of YI, Twegye (李退溪 : 1501 to -1570). Human view of YI, Twegye appears in grasp of ‘honor’. ‘Honor’ connects ‘mind (心)’ and ‘body (身)’. The whole mind is made of inborn mind and emotion. Yi, Twegye says in the sentence “No 6” of “Seon hak sip do” as follows. ‘The mind dominates inborn mind and emotion’ ‘The mind dominates the body’ ‘The mind is responsible for all changes’. And in “No 8” it says as follows. ‘The mind dominates the body’ ‘Honor rules heart’. From here, ‘honor’ rule the heart and body. Honor governs all changes. The mind has an active function. The mind can master all things. So, this is the work of ‘honor’. People become people by ‘honor’.

Keywords: YI, Twegye (李退溪), “Seon hak sip do (聖学十図)”, Kyeong (敬), body and mind (心身)